

【総評】

多くのレポートがテキストや授業を読み込んだものであった。シケタイの影響もあってか、答案には少なからずパターン化されていたものもあったが、それなりにアレンジしていたようである。ネット上からのあからさまな剽窃は認められなかった。残念であったのは、指定の字数や問題について、それを緩めに考えている学生が散見されたことである。指定した問題以外の問題について叙述したり、また同じ部から二問回答したりする例が見られた。このような「違反」は、本来であれば採点対象外とするところ、一定程度の減点で対応した。

今回のレポート提出者は94名。不可は出さず、平均点は75点程度に設定した。もともと、B-を40点とし、上はB=45点、B+以上=50点、下はC+=35点、C=30点、C-=25点として計算し、絶対評価で採点したら平均が81点になった。だが、駒場の教養の規定で優は四割以内にと定められていたために、全員から5点引き、さらに80点の人を79点にすることで、優の比率が漸く38%になったので、それを最終成績として提出した。最高点は95点、最低点は60点である。

【各評】

第一章：華夷・海禁を説明した上で、日本と朝鮮の状況について、長崎貿易、朝鮮通信使…から説明するのだから、それらの事例について一つ一つきちんと説明しているかどうか問われる。

第二章：不平等条約のありかた＋具体的な改正過程（司法権、行政権）＋アジアとの関係、といったことがはいつていけばB以上。

第三章：中国をめぐる国際政治と朝鮮をめぐる情勢の双方を、下関条約および北京議定書の後の状況から説明し、日露戦争後の列強の協商関係の成立や日本の朝鮮併合まで説明する。

第四章：日本が何から突出するのか明示した上で、二十一カ条要求と西原借款などの日本の中国への関与について説明する。

第五章：ワシントン体制について、三条約を説明し、それがいったいどのような系譜に位置づけられるものかを中国をめぐる国際政治や日英同盟から述べ、その上でソ連要因、ドイツ要因、そして北京・広東政府と九カ国条約の関係について述べる。

第六章：塘沽停戦協定から盧溝橋事件までの、華北侵出などについてまとめた上で、連続論を採るか、断絶論を採るか、自分の見解を述べればよい。そうした意味ではハードルの低い問題。だが、自説の展開において、あまりに根拠不明なことを述べると減点対象。

第七章：日本側、中国側、そして国際情勢をからめて書く問題。中国の陰謀論に偏ること、日本の侵略だけを強調するのではなく、日独伊、日ソ中立条約、あるいは日本の南部仏印侵攻など、丁寧にまとめていく必要がある。

第八章：テキストを丁寧にまとめるといいが、単なる羅列に終わるのではなく、そのような違いがなぜ出たのか、またそれが統治やその後の歴史にどのような影響をあたえたのかについても考察してほしい。

第九章：カイロ会談での議論などを踏まえた上で、中国情勢、朝鮮半島情勢などをふまえながら、対日占領政策の変容過程について説明する。賠償や経済復興をめぐる政策の変容、そして可能なら朝鮮戦争における特需まで言及する。

以上。

およそ要素がはいつていればB。やや記述に濃淡があるとB-といった基準。(了)